

2024年『讃岐典侍日記』

次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。堀河天皇は病のため崩御し、看病に

あたった作者も家で喪に服している。そこへ、女官の弁の三位を通じて堀河天皇の

父白河上皇(院)から仰せがあった。新天皇は、幼い鳥羽天皇(堀河天皇の子)である。

かくいふほどに、十月になりぬ。「弁の三位殿より
こういううちに、
十月になった。(実家の使用人が作者に)」「(鳥羽天皇の乳母の)弁の三位

御文」といへば、取り入れて見れば、
「『藤原光子』からお手紙(が届きました)」と言うので、受け取って(広げて)見ると、

ア「年ごろ、宮仕へせさせたまふ御心のありがたさ
「長年、
宮仕えをしなされる(際の)
あなたの(御心構えの素晴らしさなどを、

など、よく聞きおかせたまひたりしかばにや、
(鳥羽天皇の祖父である白河上皇が)よく聞いておいていらつしやったからだろうか、

院よりこそ、この内にさやうなる人の大切なり、
白河上皇から、
「鳥羽天皇の御所にそのような人が
とても切実に必要だ、
たいせち

登時参るべきよし、おほせごとあれば、さる心地
すぐに出仕なさい」といふことの、
ご命令があるので、
そのような心づもりを

せさせたまへ」とある、見るにぞ、
しなさってください」と(書いて)ある、(その手紙を)見ると、

あさましく、ひがめかと思ふまであきれられる。
驚き呆れ、
「見間違いか」と
思うほどまで
自然と驚き呆れた。

おはしまししをりより、かくは聞こえしかど、
(堀河天皇が)ご存命だった頃から、このようなこと「『白河上皇から作者へ、幼い鳥羽天皇に仕える要請がある
いかにも御いらへのなかりしには、
こと』は(堀河天皇は)耳にしていたけれども、どのようにも(堀河天皇の)お返事が無かったのは、

さらでもとおぼしめすにや、それを、
『そうでなくても(良いのでは)』とお思いであつたのだろうか、それなのに、

いつしかといひ顔に参らんこと、あさましき。
『早く(出仕したい)』という様子で(鳥羽天皇に)出仕するようなこと(をしたら)、(我ながら)呆れることだ。

すはう ないし ごれいぜいゐん

周防の内侍、後冷泉院におくれまゐらせて、

(似た先例として、)周防の内侍[「平仲子」]が、(仕えていた)後冷泉天皇に御先立たれ申し上げて、(後冷泉天皇

後三条院より、七月七日参るべきよし、

の弟で、次に即位した)後三条天皇から、七月七日に出仕しなさいということをし、

おほせられたりけるに、

お命じになったときに、

天の川おなじ流れと聞きながら

天の川(の流れ)のように(後冷泉天皇と後三条天皇はご兄弟で)同じ血筋の流れだと聞いているけれども、

わたらんことはなほぞかなしき

(前の主とは異なる後三条天皇のもとに)出仕するようなことは、やはり悲しいこと。

とよみけんこそ、げにとおぼゆれ。

と詠んだという歌こそ、

「もつともだ」と思われる。

「故院の御かたみには、^ウゆかしく思ひまゐらすれ

「亡き堀河天皇の御忘れ形見としては、(子である鳥羽天皇を)拝見したく思い申し上げるけれども、

ど、さし出で^いんこと、なほあるべきことならず。

(出仕するような)差し出がましいようなことは、やはりあつてよいことではない。

そのかみ立ち出でしだに、はればれしさは

その昔、(堀河天皇のもとに初めて)出仕したときでさえ、(宮仕えの)晴れ晴れしい(こと)には

思ひあつかひしかど、親たち、三位殿などしてせられ

思い悩んだけれども、

『親たちや(姉の)三位殿[「藤原兼子」]などでしなさるようなことを

んことをなん思ひて、いふべきことならざりしかば、

(反対するものどうか)』と思つて、

(あれこれ反対を)言つてよいことではなかったので、

心のうちばかりにこそ、^{あま}海人の刈る藻に思ひみだれ

内心だけは、

^も海人が刈る藻のように気持ちが悪れた(ことだった)。

しか。げに、これも、わが心にはまかせずともいひつ

本当に、

今回[「白河上皇からの命令」]も、『私の意志の通りにはならない』とも(諦めて)言つてしまうのが

べきことなれど、また、世を思ひ捨てつと聞かせ

状況ではあるけれども、

あるいは、『(私が出家して)世を捨ててしまった』とお聞きに

たまはば、さまで大切にもおぼしめさじ」と

なつたとしたら、(白河上皇は)それほどまで(私を)切実に必要ともお思いにならないだろう」と(出家するか

思ひみだれて、いますこし月ごろよりももの思ひ

どうか悩んで)気持ちが乱れて、さらにもう少し、

この数ヶ月よりも

悩みが

添ひぬる心地して、

増さつた気持ちがして、

エ「いかなるついでを取り出でん。さすがに、われと

そ「(私は)どのような (出家の)機会を得ようか。

そうはいつでもやはり、自分で

削ぎすてんも、昔物語にも、かやうにしたる人をば、
切り落とすようなのも、

昔の物語にも、

そのようにしてしまった人のことを、

人も『うとましの心や』などこそいふめれ、わが心に
人々も 『いやな心(の人)だ』

など言うようだが、

私の気持ちとして

も、げにさおぼゆることなれば、さすがにまめやかに
も、本当にそのように「自分て切り落とすのは嫌な心の人だ」思われることなので、そうはいつでもやはり、本格
も思ひ立たず。オ かやうにて心づから弱りゆけかし。
的に決心することもない。 このようにして 自分の心がもとで 弱つていつてもよいよ。

さらば、ことつけても」と思ひつづけられて、

そうすれば、(心身衰弱を)言いにしても(出仕を断ることができる)「と思ひ続けないではいられなくて、

日ごろ経るに、

数日が過ぎると、
めのと

「御乳母たち、まだ六位にて、五位にならぬかぎり

「(鳥羽天皇の御)乳母たちは、(あなたとは違って)まだ(殿上人ではない)六位で、五位にならないうちは、

は、もの参らせぬことなり。この二十三日、六日、

天皇の食事の世話が出来ない状態である。

この二十三日、六日、

八日ぞよき日。とく、とく」とある文、たびたび

八日が(出仕するのに占いで)良い日(です)。早く、早く、(出仕しなさい)「と(書いて)ある手紙を、何度も

見ゆれど、思ひ立つべき心地もせず。

(持つてこられて)見るけれども、決心しようという気持ちにもならない。

「過ぎにし年月だに、わたくしのもの思ひののち
過ぎ去った 年月でさえ、 私の一身上の悩みの後は、

は、人などにたちまじるべき有様にもなく、見苦しく
人々の間に 混じることができず、 様子でもなく、 見苦しく

やせおとろへにしかば、いかにせましとのみ
やせ衰えてしまったので、 『どうしようかしら』とだけ

思ひあつかはれしかど、御心のなつかしさに、人たち
思い悩まずにはいられなかったけれども、 (亡き堀河天皇の)御心に惹かれて、 (また、同僚の)人々

などの御心も、三位のさてもものしたまへば、その御心
などの御心にも(惹かれて)、(姉の)三位がそのままで(宮仕えを)続けていらつしやるので、「その(姉らの)御心
にたがはじとかや、はかなきことにつけても、
に背かないようにしよう」などと思ったのか、ちよつとしたことにつけても、

用意せられてのみ過ぎしに、いまさらに立ち出でて、
自然と気遣いをしてばかりで(月日が)過ぎたが、 今あらためて 出仕して、(堀河天皇と)

見し世のやうにあらんこともかたし。君は
会った時世のように 過ぎすようなことも難しい。 鳥羽天皇は

いはけなくおはします。さてならひにしものぞと
幼くいづつしやる。 『そういう状態で「堀河天皇と特に親しい状態で」慣れ親しんで

おぼしめすこともあらじ。さらんままには、昔のみ
しまつていた者だ』とお思いになることもあるまい。そのように(月日を)過ぎすにつれて、(亡き堀河天皇との)昔

恋しくて、かうち見ん人はよしとやはあらん」
のことだけが恋しくて、私をちよつと見かけるような人は、(私の状態を)良いとは言うだろうか、いや、言わないだ

など思ひつづくるに、袖のひまなくぬるれば、
ろう」などと思ひ続けるうちに、 袖が(乾く)合間も無く(涙で)濡れたので(詠んだ歌)、

たもと

キ 乾くまもなき墨染めの袂かな
(堀河天皇を偲んで涙で)乾く合間も無い、喪服の袂だなあ。

あはれ昔のかたみと思ふに
しみじみと昔の(亡き堀河天皇の)思い出(である喪服)だと思つと。